



古い倉庫群が往時の繁栄を語る小樽運河。昭和の初めに完成した右手の北海製缶第3倉庫を小林多喜二は「それは全く重艦を思わせた」と小説に書いた。現在の運河周辺は外国人観光客が目立つ小樽市色内



④テストピースを手にする小樽港事務所の矢野所長。ひょうたん型のテストピースは海水に浸すなど条件を変えて保管庫で80年以上も保存している⑤「みなとの資料コーナー」には広井が作った耐久試験用の機械も展示されている。見字は無料(土・日曜と祝日は休館) 小樽市築港

明治期の気概 今に伝え

小樽港の南端。南防波堤わきの小樽港事務所1階に「みなとの資料コーナー」がある。築港の歴史を紹介する展示室で、初代の所長を務めた広井勇や、そのまな弟子で第二期工事を指揮した伊藤長右衛門の業績を伝えている。

小樽港は明治時代の二期工事で広井が設計した北防波堤を築造。続く二期工事で大正時代に南防波堤と島防波堤が造られ、北防波堤も約420mが延伸した。展示室で目を引くのが、広井が自作したコンクリートの耐久試験用の機械類。配合を変えた材質でテストピースを作り、それを破断して強度を調べたという。

実は、100年以上たった今も耐久試験が続けられている。港務事務所では広井や伊藤が残したテストピースが海水や淡水につけた状態と水のない状態で保管されており、定期的に破断テストを実施。経年劣化の度合いを測っている。

土木技術者の評価は千年後に決まると考えていた広井は、最低でも50年以上の継続試験を望み、膨大な数のテストピースを用意した。「そこまでやろうという発想がすごい」と矢野隆博所長。今なお約4千個残っているテストピースが、明治の技術者の気概と誠実さを物語っている。

広井は小樽運河の誕生にも大きく寄与した。港務整備を埠頭方式で進めるか、運河方式にするか。小樽では明治の末に一大論争となった。広井は海岸を埋め立てる方式での運河の造成を提唱。1923年(大正12年)に幅40m、全長1324mの運河が完成した。



運河北端の運河公園に立つ広井勇の像。後ろの建物は明治時代に建てられた旧日本郵船小樽支店

多喜二が収監されていた東京の旧豊多摩刑務所の正門前に立つ萩野富士夫さん=中野区新井



「街中のいろいろな言やにおい、多くの人が見落としてちなものを、手に取るように描写している」と多喜二の研究を続ける小樽商大名誉教授の萩野富士夫さん(東京在住)。

多喜二は1930年(昭和5年)に26歳で小樽を離れて上京。労働者の意識が高まっていく転換期の時代を「大長編に描く意気込みで『転形期の人々』を書き始めるが、労働運動への弾圧も急激に強まっていた。プロレタリア文学の旗手と注目された若き作家は、3年後、特高警察の残酷な拷問で命を落とす。長編小説は未完のまま終わった。

小樽の街を見下ろす旭展望台のそばに、多喜二の文学碑がある。碑には多喜二が東京の豊多摩刑務所から友人に出した有名な手紙の一節が刻まれている。

「冬が近くなると、ぼくはそのなつかしい国のことを考えて、深い感動に捉えられている。そこには運河と倉庫と税関と棧橋がある。そこでは、人は重々しい空の下を、どれほど背をまげて歩いている」

展望台に立つと、真つ青な海の先、西腕で港を抱きかかえるように、長い長い防波堤が見えた。